

●創刊号インタビュー



船、と言えば反射的に出てくるこの人の名前

《柳原良平》

ほとんど「船キチ」の名で通っている柳原さんに、

まずは、創刊号・巻頭インタビュー

昭和10年代から平成14年6月現在まで、

柳原さんの船キチ人生談、

乗った船、描いた船……もう数え切れません

柳原良平氏 船と海を語る

船との出会いは小学3年、
京の町中で買った船の絵はがき

およそ40年前、横浜・山下町の丘からは、横浜港が一望できた。港には、客船、貨物船、大型船舶、小型艇……etc、窓を開ければ船が見えた。だから柳原さんはここに家を建てた。

今、丘から港に向かってビルが林立、窓を開けても船はおろか港も見えない。

「船が見えていたのは2,3年、4年経ったら港も見えなくなった」

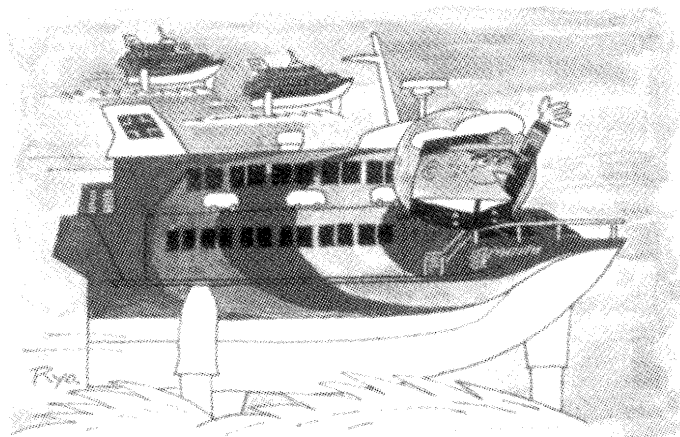
といいながら、メガネの奥の眼はそう残念そうでもなく、「10分歩けば港だから」。

訪ねた日、柳原さんは自宅アトリエで個展（7/5～15まで横浜関内駅前のせんたあ画廊で、柳原良平個展「アンクルの休日」を開催）に出展する豪華客船〈飛鳥〉を描いていた。横浜を出港間際の〈飛鳥〉は、キャンパスのなかで

ほぼ完成に近い。ベイブリッジがバックに見える。もちろんこの〈飛鳥〉にも就航間もないころ乗船済みである。

——いったい船との出会いはいつごろですか？

「銀行員だった父の転勤で5歳のとき東京から京都に移りまして、たしか小学校3年でした、京都の町で『日本優



秀船舶集』という6枚の絵はがきを見たのが、記念すべき船との対面なんです。これが実に美しく興味尽きせず、以来、船の虜です。あれからもう60年以上経っていますが、一向に船への想いは変わりませんなあ」

柳原少年は、あらゆる船の雑誌、画集を集め読みふけた。絵が得意だったので船の絵もいっぱい描いて、教室の黒板に張り出されたこともある。客船はもちろん、軍艦の雄姿にも惹かれ、海軍雑誌『海と空』や海軍年鑑から情報を集め、模型セットを買っては軍艦の模型を作った。そのころ世界中にどんな船があるかもだいたい知っていたし、情報として戦艦〈大和〉の存在も、およその形も、分かっていたという。

「最も好きだったのは重巡洋艦の〈那智〉でした。形が良くて強そうだった」
しかも、ほとんどの軍艦のトン数、装備、形式などは暗記していた。

「そんな折、ぼくが初めて船に乗るチャンスがあったんです。大阪の天保山の港から、摂陽商船の山水丸（812トン）に乗って四国徳島の小松島港へ入港した。夜遅く出て、揺れなくなったと思ったら朝早くには着いていた。短い船旅でしたが、楽しかった！」

柳原少年を感動させたこの“初航海”は、実は父の徳島転勤のおかげ、夏休み、単身赴任の父を訪ねるための船旅だったのだ。その後何回も徳島へ渡るが、その都度乗船した船を全部覚えている。船名、トン数、船会社、さらにその親会社……60余年昔のことなのに、昨日のことのようすらすらと説明してくれる。

こと船に関しての記憶たるや、まさに天才的である。

終戦直後、沈まなかった船の全調査

——船への思い入れは、子どもの興味から年齢とともに成長していったのでは……？

「転機になったのは大阪商船の造船技師で、工学博士の和辻春樹さんが書かれた『船』です。むさぼるように読んで船の見方が変わり、造形的、工学的な美しさを知ることになりました。ますます船好きになりましたね。太平洋戦争直前の昭和15、16年でした」

柳原さんの青春期は戦争まっただ中、時局がら軍人になろうとトライしたが、近視で不合格。

中学2年当時住んでいた西宮では、近くに飛行場があったせいで飛行機にも興味をもったが、船以上にはならず終戦を迎えた。

「戦争に負けてほとんどの軍艦がやられてしまいました。軍艦の方は報道である程度状況を知ることができましたが、では商船はどんな結末を迎えたか？ それを知りたいと思いました」

そのとき中学2年の柳原少年は、どんな行動に出たのか——

「日本の船会社という船会社全部に手紙を出したんです。戦争が終わってどの船が残り、どの船が沈んだのか、自分の知ってる限りのリストを明記して、返信付きで出した。ほとんどの船会社が返事をくれました。そして、ほとんどの船が沈んでいました。主だった船は無くなっていても、興味はますます深まっていきましたねえ。

中でも大阪商船（現商船三井）は、写真などを同封してくれて、遊びに来なさい、と——」

いわばこの1通が、柳原さんをさらに船にのめり込ませることになった。同商船の若い造船技師、加名生浩一さんと親しくなったころは、

「もう完全に船キチの世界です」。

戦後初の外航貨物船として有名な〈大阪丸〉の設計図を借りて200分の1の紙の模型を作り、社長に献上したり、造船技師になろうと思ったり、船会社の宣伝部に就職したいと考えたり。しかし、空襲で家が焼け学校へしばらく行かなかったのも、造船のための勉強にとりかかれず、親しい船会社は客船は造らないから宣伝を必要としないと断られたり。

造船業界が、徐々に戦後回復の兆しを見せ始めていたころである。



柳原さんは「アンクル船長の館」から海事思想の普及を発信中

懐かしの“アンクルトリス”は 短足胴長の船長さん

——就職は船とは無関係のウイスキー会社。
「夢はつぶれ、ひょんな縁で、昭和29年に入っ
たのが寿屋（現サントリー）です」。

同社のウイスキー・キャラクター“アンクル
トリス”は一世を風靡した。キャラクターは、
当然のことながら船長さん、遠回りはしたが船
の宣伝には一役も二役もかっている。柳原さん
は、今は亡き作家の開高健、山口瞳氏らと、戦
後のCM文化を築くことでも、船としっかり結
びついていた。

「在職中にも客船のポスターを頼まれたり、
船の模型やイラストの展示をしたり、寿屋の本業より船関
係の仕事が多くなりすぎ、サントリーは5年で辞めました。
それからは船一筋です。趣味が本業になったというところ
ですね」

——そして『船の本』の出版が評判になり、名誉船長の
肩書きが数々……

「出版記念会のとき商船三井から名誉船長の辞令をもら
いました。その4年前、昭和44年に名誉一等航海士の免許
ももらった、若いから船長は早いと（笑い）。

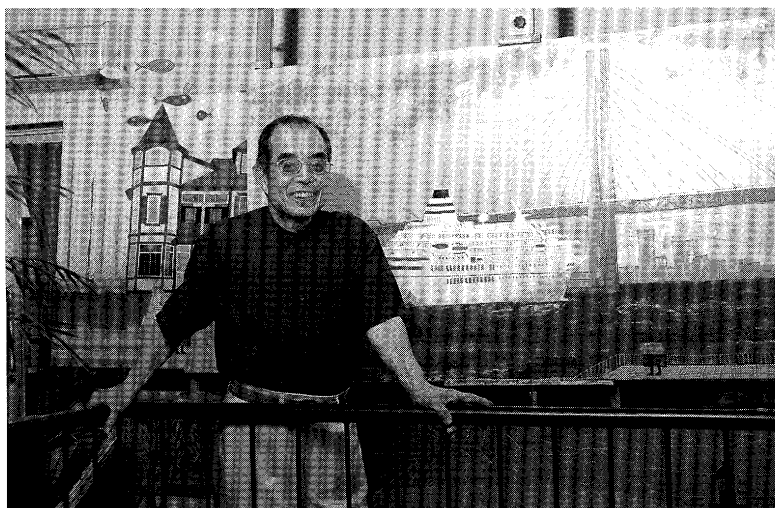
その後、佐渡汽船、太平洋フェリーなどの名誉船長をい
くつか務めて、最も新しいのは、東海汽船で1昨年の〈アル
バトロス〉、この春就航したジェットホイル3隻、船名
と船の色を決めたのはほくで、〈セブンアイランド愛・
夢・虹〉。3隻の高速船は東京湾を美しく走ってますよ。
一昨年、50周年を迎えた《船長協会》の名誉会員にもさせ
てもらっています」

——船旅を楽しむ人が増えていますが、ご自身の船旅
については……

「子どもの時の徳島航路はともかく、一番感激したのは
1969年にニューヨークまで飛行機で行って乗った〈クイー
ンエリザベス2〉。大西洋航路の素晴らしさに大満足しま
した。3日くらいだったかロンドン、ポーツマスをみて、
また帰りは〈ユナイテッド ステーツ〉でニューヨークへ
戻りました。

昨今は、速い船に関心のある人が多いけど、船旅はのん
びりと退屈な時間を買って楽しむってのが、ほくの流儀で
すし、何もない海の上を動く船で、次の港へたどり着くま
での退屈な時間、これが楽しい。船旅は本来そういうもん
だと思っています。

甲板のない高速艇は船旅には向きませんなァ。最近は、
クルーズが団体バスツアー化して騒々しいので、ちょっと
なじめない」



キャンパスの〈飛鳥〉は完成間近

話の中に、柳原さんの数々の船旅記録が船の名とともに
飛び込んでくる。

半世紀前の新婚旅行で乗った関西汽船の〈舞子丸〉、瀬
戸内を走った〈第11東予丸〉、移民船〈あるぜんちな丸〉
……、そして数年前の〈クリスタルハーモニー〉、〈飛鳥〉
まで、およそ数十の船名が鮮やかに並んだ。

まず船ありき

——海への想いも語ってください。

「率直に言いまして、海はどうでもよい。一に船、二に
港。まず船があればよろしい。船あっての港、ところが残
念なことに横浜の港に、このごろ船のほとんど無いときが
ありますね。絵になりません。若い頃は新しい船が好きで
したが、年とってからは、小舟がもやってあるひなびた漁
港の風景なんかも好きになりました。よくスケッチに行き
ます」

——最後に『船と海のサイエンス』の創刊へひとこと
「日本人に顔を向けた船を造って、動かして欲しいと、そ
うすればもっと多くの人が船に、造船に、船旅に興味を持
ってくれますよ。日の丸をつけた船を、もっとたくさん見
たいなあ」

やなぎはら・りょうへい

画家。昭和6年8月17日、東京生まれ。29年
京都美大卒後寿屋（現サントリー）宣伝部入
社。キャラクター「アンクルトリス」の34年
毎日産業デザイン賞など受賞多。「船の本」
「船の画集」など船関係著書多数。
1995年、広島県尾道市に柳原良平のミュージ
アム「アンクル船長の館」オープン。趣味
は？ と聞けば「酒」と答える無類の酒好き。
船に乗ってお酒を楽しむために、健康に留意
する。

